

ばらんす

第30号

編集発行

大田原市総務部企画政策課
男女共同参画係
〒324-8641
大田原市本町1丁目4番1号
☎ 0287-23-8701
FAX 0287-23-8748

心に、思いやりのベルを…

(津久井市長インタビュー)



「ばらんす」は発行から一五年、男女共同参画広報紙として三〇号を迎えました。この間に、世の中は少子高齢化社会が現実の姿となり、男女共同参画の推進も新しい段階に入ったように思えます。

今号は記念号として、去る二月一日、市政二年目を迎える津久井市長を訪ね、本紙編集委員が市民目線でインタビューを試みました。行政の長として、家庭人、企業人として、男女共同参画に対する基本的な考え方、五カ年計画の最終年度を迎える大田原市男女共同参画行動計画(プラン)の取組み、「ばらんす」の役割、意義など広範囲に話を伺いました。

【編集委員】

私たちは男女共同参画広報紙「ばらんす」の編集を行っています。津久井市長は

男女共同参画について、どのような考えを持っておいででしょうか。今日は市民目線でお話を頂ければと願っ

ています。よろしくお願いします。

【津久井市長】

こちらこそ、よろしくお願ひします。私は、男女の存在は自然の摂理であり、お互いの違いを共に認め合う世界と思っています。決して男の世界、女の世界と争うものではないと思います。

意識作りが大切…

《意識が変われば、社会も変わる》

【編集委員】

大田原市では、五カ年計画の男女共同参画行動計画(プラン)が最終年度を迎えますが、どのように取組まれるのでしょうか。

その心意気などをお聞かせ下さい。また、欧州諸国で取り入れられているクォータ制(割当て制度)の導入については如何でしょうか。



【津久井市長】

プランの基本目標で示す三つの目標①男女共同参画の意識づくり、②男女があらゆる分野へ参画できる社会づくり、③男女が心豊かに暮らせる環境づくりを変えずに目指す事が大切だと思います。その中でも一番大事なのは意識づくりと想っています。

私たち一人一人の意識が変われば世の中は変わります。あらゆる分野への女性の進出、男性社会の壁を破り大いに挑戦して頂きたいと思っています。



クオータ制については、基

本的には、男性側からの押し付けのような感じがいたします。既に、多くの家庭ではお父さんとお母さんの関係は、共存関係にあるのではないのでしょうか。むしろ、我が家でもそうですが、家庭を預かる女性の方が主導権を持っているとの見方もあります。いろいろな職種で女性あるいは男性が進出しているのが現在の社会です。早晚、女性の市長、首相、社長も珍しくなくなると想っています。

女性は、多に夢を持って頂き、社会のあらゆる分野に進出して頂きたいですね。組織で女性、何パーセントなど、クオータ制といわず、女性の皆さんに大いに進出して頂き、男女が共に生きる幸せなまちづくりを目指したいと思います。



自宅介護十年… 夫婦で苦勞を わかち合う

【編集委員】

津久井市長は、お母さんの介護をされてこられたとお聞きしていますが、少子化・長寿社会を迎え、家庭内では両親の介護、お互いの介護などが新たな課題になっていくと思います。家庭あるいは企業人の体験を踏まえて男女共同参画、夫婦のあり方などをお話し頂ければ……。



【津久井市長】

母親が脳梗塞で倒れた時、父親から「お前たちの部屋にベルを繋いでくれ」と頼まれました。その夜から七時、九時、十一時、午前三時と際限なく「ベリリー、ベリリー」とベルが鳴り始めました。その度に、妻が起きて母の介護に向かっていました。その音が一週間、一ヶ月と続き、私は、自

佐久山とらいつつちよう

(平塚とらいつつ)

今年は一九二一年文芸誌『青鞥』が創刊され一〇〇周年、そして平塚とらいつつ没後四〇年である。

青鞥の巻頭の辞「元始女性は実に太陽であった。真正の人であった」はあまりにも有名である。

一九九一年(平成三年)一月二十一日大田原市女性団体連絡協議会主催の、第八回婦人のつどいにおいて、らいつつ研究家小林登美枝氏による講演があった。テーマは『らいつつからのメッセージ』であった。らいつつはどんな人であったか。

平塚らいつつは、明治から昭和にかけて女性運動の先駆者として生きた人である。女性運動の先陣をきつたのだ。一九一一年(明治四四年)男尊女卑のまった中「女性として生まれてきた我々の幸せを喜びたい」と述べている。それだけに近代的自我に目覚めた進歩的女性であった。明治末期からはじまった女性解放の戦いは、生やさしいものではなかった。女性解放は単なる男女同権、男女平等ということではなく、女性は女として開放されるべきと唱え続けた。

平成の今、私たちは男女共同参画を唱えあげ実現へと向かっているが、これらほらいつつ始め女性たちの築いた歴史の上に立つてのものである。今日の女性問題の殆どは、らいつつの提起によるものといえる。一九四六年女性が選挙参政権を獲得したあの記念すべき年のことは鮮明に覚えている。一九七六年の国際婦人年には、女性差別撤廃条約が成立し始動した。らいつつは、二人の子の母でもある。

産む性である母性の尊重と子どもの権利を主張する思想はいのち・平和の願いへとつながる。命を育む母として、一九五〇年頃からすべての汚染問題に対して目を向け環境・大気・食物・水汚染、そして地球が危ないと訴え始めた。「台所は生命の薬局である」と唱え、台所を預かりまた生命を産み育てる母としての立場からのものであった。

大田原とらいつつつながりは、夫・子ども二人とともに佐久山に住んだことだ。佐久山の自然の中で生活したのは、一九二二年(大正一〇年)末から翌年の秋頃までである。

短かった佐久山での生活を生涯の中で最も人間らしく子どもたちの母親として、妻として生きられた……生涯忘れられない思い出の地との言葉が残されたらいい。

分の母親の叫びと分かっている、ベルが「ビリ」と鳴ると身震いがしました。そんなある日、黙って起きてくれていた妻から「あなたの親でしよう」と、ひとこと言われ夫婦で介護をするようにしました。母親の介護は十年続きましたが、その間、夫婦で共に苦労を分かち合い、妻に心から感謝できるようになりました。

家族協定を結ぶ

我が家は、家族で作業を分かち合う農業経営ですが、妻には女性にあった作業を選び、機械操作なども学んで貰いました。また、作業内容、時間、休日、給与などもお互いに家族協定を結び、利益を配分し月給をあげています。

また、我が家の男女共同参画では、両親の配慮が先進的であったと振り返っています。

それは、妻との結婚に際して、両親は妻と養子縁組を結び、権利の上でも家族の一員として迎えました。この心が、後の母の介護に繋がったのではと思っています。

また、私は会社経営者でもありますが、企業人として、もちろん利益を追求しなくてはなりません。しかし、会社は「公の器」の一面も持っていると考えています。

成熟した社会の企業は、多様な価値観を持つ人々の幸せを目指すべきと考えています。仕事と、職場を離れてからの人生を共に謳歌できる事が大切です。その為に企業はワーク・ライフ・バランスが実現できる余裕のある人員構成が必要と考えています。

いろいろな困難を抱える社会、企業も個人も、男女も



お互いに多様性を認める、新しい価値観を持たなくてはいけないと思っています。

【編集委員】

貴重なお話をありがとうございました。最後に「ばらんす」について感想と、今後の要望、期待を伺いたいと思います。

【津久井市長】

「ばらんす」の優しい紙面、皆さまがボランティアで作られているからでしょうか、楽しく読ませて頂いています。

男女共同参画の啓蒙、関心の薄い方には中々浸透が難しいと思いますが、そのような方も含めて広く市民の皆さんに読まれ、心に伝わる広報紙を目指して頂きたいと願っています。

編集員の皆様の益々のご活躍を祈っています。



佐久山に住みて 平塚らいつい

——食物といえは子供らの食物も東京にいる時分とはずいぶん変わった。「お三時」に生味噌を塗りつけたおむすびや生の人参やおさつを平気でしかもよるこんで食べている。のびるを野でとってきてはこのうえもない珍味でもあるかのように惜しみ、惜しみ食べている時もある。「敦ちゃん、川さらいだからいこうよ」とまだ朝の食事もすまないうちからお友

達二、三人で誘いにくる。一本棒の清ちゃんも裸足で箆をもって立っていた。子供たちは箆を投げて飛び出した。なるほど外へ出るとバケツや桶や竿をもって幾組もの子供の群れが通る。

屋近くにはもう鰻や鯉や鮒などのはいった桶がどこの家の土間にも見られた。それらの桶の回りに額を集めている子供らの土だらけの顔にも、その生き生きした笑い声にも歓喜が溢れていた。

春秋二期に行われるというこの川澄いは田舎の子供らをどれほど躍らせる事だろう。わたしは自然の中に放り出されている彼らも勝ち得る多くの幸福を考えずにはいられない——

平塚らいつい 著作集 第四巻より 一部抜粋



お手伝いだ〜いすき!! 〜親子味噌作り体験〜

市農村生活研究グループ協議会（「農生研」）主催で、10組29名の親子が味噌作りに挑戦しました。

子どもたちは、ゆでた大豆を試食したり、大豆と麴を混ぜ合わせたり、挽いた味噌をボール状にして桶に入れたり大活躍です。

参加したお父さんたちは、洗濯や食事作り、片付け、掃除などの手伝いをしているそうです。子どもの多くも、家のお手伝いを楽しんでやっているようです。

「味噌作りは初めてで、家族との触れ合いができて良かったです」「五感を活かした食育体験になりました」等の感想が寄せられました。

最後に「農生研」の会員に作ってもらった「味噌おむすび」と「けんちん汁」をおいしくいただき、おみやげには、自分たちで仕込んだ「味噌」を嬉しそうに持ち帰りました。



11月22日（親園農村環境改善センター）

大田原市女性の海外研修



〜第9回はイギリス・フランスへ〜 平成22年10月5日〜14日の10日間

アムール

私たち10名の団の名称は、「Amour・愛」です。

共に手を取り、同じ思いをつなげよう！というテーマを持ってこの研修に取り組みました。

第9回目にして、初めてのイギリス。ここでは、教育（保育学校）、福祉（高齢者住宅施設）を視察。なんとといっても、子どもからお年寄りまで、さまざまな人種の人たちが集まりながらも、みなぎ生き生きと生活している様子がとても印象的でした。



イギリスの保育学校

街の中には、緑地公園がたくさんあり、人にやさしい街づくりが感じられました。

事前研修で毎回大田原市歌を歌い、今ではいつのまにか口ずさむようになっています。〜♪《この街に生まれてよかった・この街に住んでいてよかった》♪〜と。

この研修に参加して「男女共同参画社会づくり」が奥の深い意味のあるものだといから感じられました。

これから先、みなさまとともにいろいろな活動に参画していこうと思います。まずは、道路の里親活動を、その第一歩として……。

（団長：相馬）



パッキンガム宮殿の前で

ばらんす ちょこっとメモ

今から半世紀前の昭和35年、池田隼人内閣が発足。中山マサが厚生大臣に就任した。これが日本初の女性大臣誕生であった。

中山厚生大臣は、在任中、小児マヒ対策や母子家庭への児童扶養手当支給の法制化に尽力した。



編集後記

本広報紙「ばらんす」は発行から15年、30号と言う節目を迎える事が出来ました。市民の皆様と共に考え、歩んでまいりました。編集員一同感謝申し上げます。男女共同参画社会の実現に向けて、今後も皆様方のお力添えをお願いします。（鈴木）

編集委員（五十音順）

磯 由美子 栗原 敏子 佐藤 長子
鈴木 成美 谷辺 範夫

